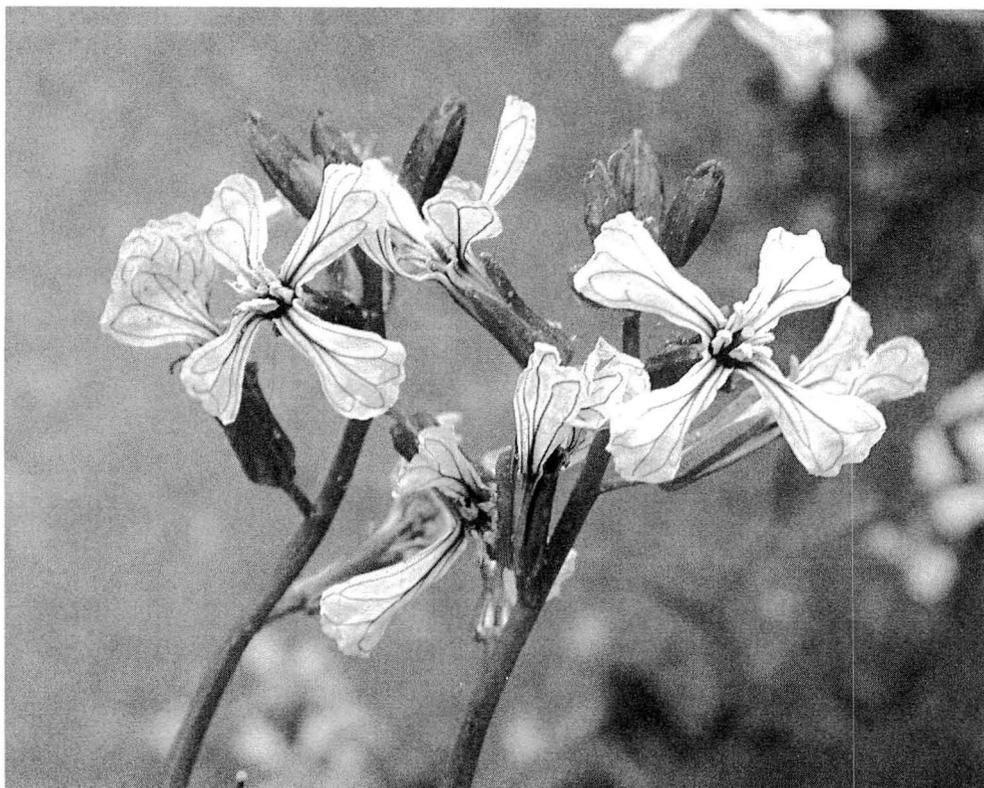


FLORA KANAGAWA

Sep. 16. 2004 No.58

神奈川県植物誌調査会ニュース第 58 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会
TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846
e-mail katsu@nh.kanagawa-museum.jp
郵便振替 00230-5-10195



キバナズシロ . 詳しくは本文 717 ページを参照 .

浜口哲一：メリケントキンソウの花.....	716
浜口哲一：平塚のキバナズシロ.....	717
関野祥子：大山でサカネランを観察.....	717
城川四郎：ヒメノヤガラの新産地.....	718
木場英久：日本新産種クキナシマツヨイグサ.....	718
堀内洋：神奈川県植物誌 2001 の補遺，正誤及びその後の新知見.....	719
木場英久：オオチゴユリとエダウチチゴユリ.....	722
出川洋介：入生田からタキミシダを発見.....	723
勝山輝男：上瀬谷のキクバアリタソウ.....	725
事務局：2004 年度総会報告.....	725

メリケントキンソウの花

(浜口哲一)

メリケントキンソウは、横須賀市の米軍基地内で採集された標本によって、大森(1996)が県内での分布を初めて報告した外来種である。『神奈川県植物誌2001』には、その他、横浜市中区と平塚市に分布点が打たれている。2004年3月30日に、平塚グループで平塚市四之宮の相模川(「平塚3」メッシュ)を歩いたところ、河川敷を利用したグラウンドのよく刈り込まれた芝生の中に相当数の本種が生えていることに気づいた。思い起こしてみると、『神奈川県植物誌2001』にある「平塚2」メッシュの産地も同様な環境であった。また、4月17日には、同じ平塚3メッシュ内にある平塚市大原の総合公園で、再び本種を見つけた。こちらは、レンガを組んだ石畳のすき間に、チドメグサ・ツメクサなどとともに根を下ろしていた。

ところで、この植物の花は、ほとんど緑色で目立たず、花とは思わず見過ごしてしまいそうなものである。『原色日本帰化植物図鑑』(保育社)には「頭花は径7-10mm。総苞片はほぼ同長で2列に並び、黄色の筒状花を包む。」とあり、『日本の帰化植物』(平凡社)にも、それを引用したものか「頭花は径7-10mm。総苞片は2列につき、長さ形ともほぼ同じ。小花は筒状で黄色。」と記載されている。『神奈川県植物誌2001』には、属の記載として「外側の筒状花は雌性、内側の小花は雄性として機能する。」という一文がある。しかし、実際に観察してみると、これらの表現は必ずしもあてはまらないような

ので、観察結果を書いておくことにした。

本種の頭花は無柄で(この点で、一見似ているマメカミツレと区別できる)、ロゼット状に地上に広がる数枚の複葉の中心につく。それらの複葉の葉腋からは枝が分かれ、その先端にも花がつく。総苞片は、5~6枚で、2列についており、ほぼ同型の三角形をしている。縁や裏面に長い毛が目立つ。花序は、二通りの花から構成されており、外側には花冠を持たない緑色の雌性花が十数個並んでおり、その柱頭は2つに割れている。形態は図に示した通りで、熟すにつれて左右の翼が広がり、この種の特徴である変わった形の瘦果となる。

花の中心部には、雌性花に囲まれるように雄しべと雌しべを持つ筒状花が十個弱かたまっている。筒状花の花冠は先端が4裂し、雄しべが4個ある。花冠は淡い緑色だが、半透明なので、中の黄色い葯が透けて見えている。雌しべは軟弱で、熟すことはないと思われるので、中央の花は雄性と考えてよいであろう。

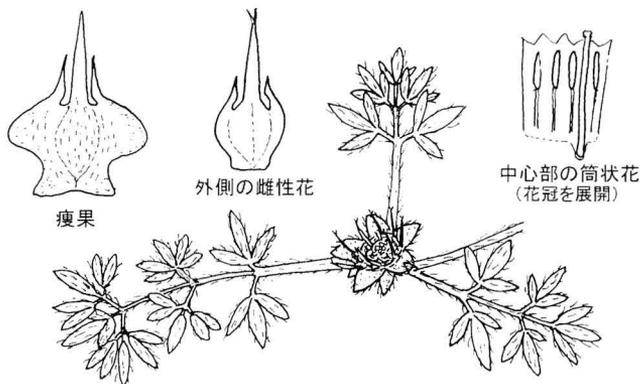
つまり、本種の頭花の形態を要約すると、「2列の総苞片に包まれて、外側には花冠を持たない雌性花が並び、それらに取り囲まれるように雄性として機能する筒状花があり、黄色い葯が目立つ。」といったことになる。

引用文献

大森雄治, 1996. アメリカ海軍横須賀基地内の植物. FK, (42): 452-453.

標本

平塚市四之宮相模川 2004.3.30 植物誌調査会平塚グループ HCM-56-91119



<後日談>

上記の原稿を書き上げて木場さんに渡した翌日のこと、市の教育委員会スポーツ課の方が、訪ねて来られた。「困った、困った」という第一声は何事かと思えば、袋に入った草が差し出され、それがメリケントキンソウだったのである。平塚2メッシュの分布地点となっているグラウンドで、これが芝生にはびこり、「ストレッチをしようと芝生に腰を下ろすとチクチクして痛い」という苦情が出たのだそうである。対策があるかと聞かれたので、たぶん芝生の草丈を低く刈り込んで管理しているのが、この種にとっては好都合なのだろうと答えするくらいしかできなかったのだが、内心では、グラウンドを使う人もずいぶんぜいたくなことを言うものだ、一面に生えているわけではないのだから、少し場所をずらせばすむのではないかと思った次第である。

平塚のキバナズシロ

(浜口哲一)

2004年4月9日に、平塚市代官町の路傍で見られないアブラナ科植物を見かけ、調べてみたところ、キバナズシロであった。『神奈川県植物誌2001』には、鶴見区など4箇所の分布が報告されているだけで、湘南エリアでは初めての例となったので報告しておく。

生えていた環境は、交通量の多い国道で、車道と歩道間のグリーンベルトの植え込みに、数株が生えていた。見つけた日がちょうど満開



キバナズシロの果実。

で、10日ほどたって再訪した時には、花がほとんどなくなっていた。『日本の帰化植物』(平凡社)に写真が出ているが、全形写真で細かい特徴が見にくいので、花(表紙写真参照)と若い実のアップの写真をあげておく。花がクリーム色で紫色の筋が走っていること、実に扁平で長めの嘴があることに気をつければ、同定は容易であろう。

なお、本種はロケットないしルッコラという名でサラダ用の野菜として栽培されるそうで、湘南ブロックの会員の中にもプランターで育てているという方がいた。

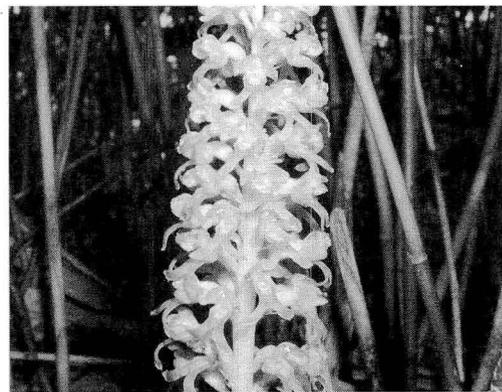
標本

平塚市代官町 2004.4.9 浜口哲一 HCM-56-91117・91118

大山でサカネランを観察

(関野祥子)

2004年5月19日(天候曇)に、ヤビツ峠から大山へ登る尾根の登山道脇(標高約950m)のスズダケの中で満開のサカネランを観察、撮影したので報告する。植物誌調査のメッシュでは、秦野3となる。観察者は、浅川久子、船木瞳子、脇田信雄、関野祥子の4名で、船木が写真を撮影した。『神奈川県植物誌2001』によると、サカネランは東丹沢ではきわめて稀なようで、大山では初めての記録になると思われる。なお、写真で同定をして頂いた馬場しのぶ氏に感謝する。

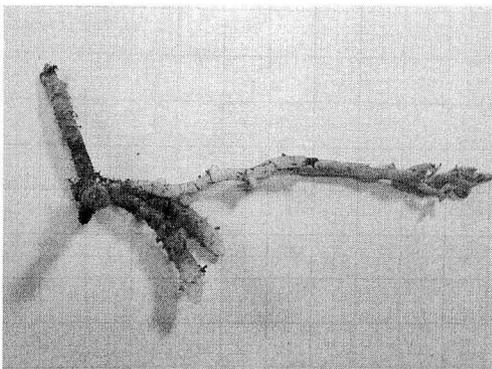


サカネラン。

ヒメノヤガラの新産地

(城川四郎)

2004年7月28日、札掛のモミの株元で、同行の中島稔さんがヒメノヤガラ数株を発見した。珍しいとされている種類で、「神奈川RDB」では絶滅危惧種にもなっている。かつて私は鎌倉源氏山で本種に出会ったこともあり、本誌No. 39 (1994)にその覚え書きを投稿したこともあったが、そのとき生育環境には全く言及しなかった。記憶ではシイ・タブの高木にヒサカキなどの低木が茂る暗い林床であった。神植誌 2001でも本種について、本県では常緑広葉樹林の林床に生えると記されている。しかし、今回の生育地は、モミ林の中の日照の悪い山道の片側で、モミの株元近くである。数株が立派に生育している様子を見ると彼らにとって決して悪い環境ではないと判断された。針葉樹林の林床にも生えることがわかったので記録しておきたい。1株を採取し、県立博物館に収納する。



ヒメノヤガラ。

日本新産種クキナシマツヨイグサ

(木場英久)

2004年6月27日、茅ヶ崎市赤松町で *Oenothera triloba* Nutt. (= *Lavauxia triloba* (Nutt.) Spach) を埜村恵美子さんが採集された (KPM-NA0123950, 0123951)。かなり被害も受けていて帰化植物として定着するかどうかはわからないが、日本新産であると思われるので報告する。この種の英名は Stemless evening primrose という。実際には短い茎があるが、英名をもとにクキナシマツヨイグサという和名を新称する。

発見された埜村さんによると、現地は茅ヶ崎市の指定緑地になっていて、カキ、サクラ、ツツジなどが植栽されていて、定期的に草刈が行われる場所だそうである。また、黄色の直径6cmくらいある花は、雑草の中でも目立ち、すぐにマツヨイグサ属とわかったが、タンポポの葉の切れ込みを深くしたようなロゼット状の葉と、その中心から10cm位の萼筒を伸ばした花は他のマツヨイグサにはない特徴だったので、これは新しい帰化植物ではないかと思ったそうである。

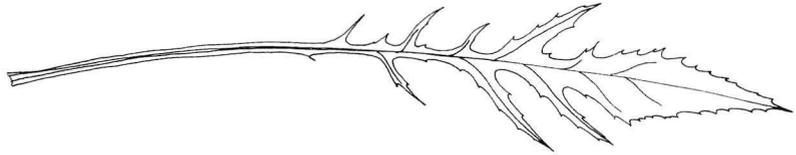
この植物は、多年草で、節間が詰まり、地上茎が短い15cm程にはなる。葉はほぼ地際につき、羽状に深く切れ込み、頂裂片が大きい。葉縁と葉裏脈上に微毛が生え、葉の基部は葉柄状になる。花は葉腋につき、花弁は1cm弱の長さで、黄色い。柱頭は4裂し、萼筒は長く3~10cmになり、密に毛が生える。長さ2cmくらいの蒴果は図のように5mmくらいの幅の翼が4つ張り出し、全面に密に短毛が生える。花(果)柄は短い。

つまり、ほとんど無柄の子房が葉腋についたままで、萼筒が細長く伸びて高い位置に花を咲かせるのである。埜村さんは現地を観察していて、最初のころ、花は次々と咲くのに、果実がつかないのが不思議だったが、観察するうちに茎の基部に固まったようについたそれを見て驚いたそうである。私と一緒に標本を見ていた野津信子さんは、「子房下位だということが、とってもわかりやすい」と言っていた。

普段はイネ科以外の植物を敬遠しがちの心の狭い私であるが、たまたま酒井聡樹氏著の『植物のかたち』(京都大学学術出版会)で、葉と



クキナシマツヨイ。
 左上：全体，右上：4つの翼がある果実，右：葉（佐々木あや子画）。



直立茎と匍匐茎へのエネルギー投資量の合計が一定だと仮定したときに、どのような個体密度と光条件のときに、茎や葉へのエネルギー分配をどのようにしたら有利になるかを考えるモデルの話を読んだ直後だったので、マツヨイグサ属植物に茎の短い種が（本種の他にも数種）あるのを知り、その生育環境と茎の関係について興味をそそられてしまった。酒井氏のモデルだと、植物の上層が覆われず（つまり草原のような環境で）個体密度が比較的低いと、ロゼット状の形態が有利になるのだそうだが、この種の原産地は北米の乾いた岩場だそうで、このモデルでうまく説明がつく。

文献

Gleason, H.A. & A.Cronquist, 1991. Manual of Vascular Plants of Northeastern United States and Adjacent Canada, Second Edition. lxxv+910pp. New York Botanical Garden, New York.

神奈川県植物誌 2001 の補遺，正誤及びその後の新知見

(堀内洋)

1. チャガヤツリの異名について

堀内（2002）で *Cyperus krameri* Franch. & Sav. をチャガヤツリのシノニムに追加したが、これは裸名であるので命名者名の後に "nom.

nud." をつけるべきである。以下のように訂正しお詫びする。

"*C. krameri* Franch. & Sav., Enum. Pl. Jap. 2(1): 104 (1877), nom. nud."

2. アオチャガヤツリの国内の新産地

京都大学総合博物館でアオチャガヤツリに相当する下記の標本を見出した。これで、アオチャガヤツリの産地として、埼玉県，東京都（伊豆大島），神奈川県，愛知県及び和歌山県が確認されたことになる。北川・堀内（2001）では帰化植物の可能性が高いとしたが、比較的古くから採集されているので、帰化でない可能性もあると思う。

証拠標本：三河豊根町（現在の愛知県北設楽郡豊根町）1943.9.5 鳥居喜一 KYO.

3. *Cyperus tenuispica* Steud. の和名について

北川・堀内（2001）では *C. tenuispica* の和名にミズハナビを第一にあげ、ヒメガヤツリをその異名とした。ヒメガヤツリの和名はヒナガヤツリ *C. flaccidus* R.Br. と紛らわしかったためと記憶する。ところで、牧野（1948）は、*C. tenuispica* をミズハナビ（一名ヒメガヤツリ）とし、ミズハナビは「水花火」で水湿地に生じ花序が「煙花」（花火：実際には線香花火のことか？同図鑑の図の花序は線香花火に似ている）であることに、ヒメガヤツリは「姫蚊帳釣」で弱々しく小型であるこ

とに、それぞれちなむとしている。また、大井(1982)は、コアゼガヤツリと *C. tenuispica* とが共に花序を線香花火に見立てミズハナビ(水花火)ともいわれると記述している。改めて考えてみると、子供たちが花序の付いた茎を1本引き抜いて「水花火」としてはやし立てたのは、田園地帯の水辺にも普通に見られ、匍匐根茎を持つことから、引き抜こうとすると、茎が1本のみ取れやすいコアゼガヤツリが最も当てはまるように思われる。しかし、昔の人々が分類群を正確に区別していたとも考えられないので、外見がよく似て何れも「水花火」の和名に値する形態を備えている *C. tenuispica*、コアゼガヤツリ、ツルナシコアゼガヤツリを総称して「ミズハナビ」と呼んでいたと考える方が無難である。今のところ各和名の初出が不明で各分類群と各和名との対応が整理が出来ないので、仮の措置として *C. tenuispica* に対しヒメガヤツリの和名をあて、ミズハナビの和名は上記3者の総称として扱うのが無難と考える。よって、植物誌の *C. tenuispica* の標題及び本文をそれぞれ次のように変更する。標題:「(16) ヒメガヤツリ *Cyperus tenuispica* Steud.」

本文: 文頭の「別名ヒメガヤツリ。」を削除。

文末の「標本: 津久井郡?」の前に次の文章を追加。「本種ヒメガヤツリやコアゼガヤツリに対しミズハナビの和名が用いられることがある。ミズハナビの和名は、水辺に生える植物体から花序のついた茎を1本抜いたものを花火に見立て「水花火」としたと考えられる。従って、ミズハナビの和名は、本種、コアゼガヤツリ、ツルナシコアゼガヤツリの何れにも当てはまり得るので、これら3種の総称として用いた方がよいと考える。」

4. アゼガヤツリの雄しべの数

アゼガヤツリの雄しべは2個である。ここに訂正お詫び申し上げる。

5. セフリアブラガヤの学名

Flora Kanagawa (52) の p.616 右列上から2行目のセフリアブラガヤの学名を次のように変更する("g"が一つ多い)。

"*S. georgianus* R.M.Harper" → "*S. georgianus* R.M.Harper"

なお、この誤りは堀内がコメントを求められた日本生態学会(編)(2000)でも引用されてい

る。同書の監修者にも連絡済みであり追って訂正がなされると思うが、同書の引用も考えられることから併せてお詫び申し上げる。

6. ハタバカンガレイ補遺

ハタバカンガレイが記載された(Sato et al., 2004)。学名を *Schoenoplectus gemmifer* C.Sato, T.Maeda & Uchino という。また、堀内(2002, 2003a)で和名、分布域、生育環境や形態的な特徴等について報告した。以上をふまえ、神奈川県植物誌 2001 p.436 のハタバカンガレイの本文を以下のように改正する。

「別名ハコネカンガレイ、ナスノカンガレイ、オトマスカンガレイ、キタガワカンガレイ。叢生する多年草。浅水中に抽水し、しばしば一部もしくは全部の茎が水中に水没して水の流れになびいて生育する。茎は柔らかく、花序が熟す頃に株もとより倒れ接地した小穂より芽生するほか、水中にある花序からは盛んに芽生し、栄養繁殖をおこなう。日本産の他のカンガレイ類は柱頭が3岐するのに対し、本種は3岐するものが混じるものの2岐するものが多いことで明確に区別できる。また、県内産の標本で葯の長さを測定してみると、ハタバカンガレイ約1.3mm、カンガレイ2mm強、タタラカンガレイ0.7~0.8mmと異なる。全国の標本を調べてみると、刺針状花被片は(3~)6~7(~8)本で、高さは同一果実でもばらつきがあるが、熟した瘦果よりやや低いものとやや高いものが混じる~熟した瘦果より全て明らかに長いまで変異が認められた。箱根産で確認したものは、刺針状花被片は6~7本で全て熟した瘦果より明らかに長かった。瘦果の横断面は柱頭が3岐する場合は三稜形状、2岐する場合はレンズ形状となる。柱頭の分岐数、花被片の数、熟した果実における花被片と瘦果との相対的な高さ比等の形質は、産地によってもある程度変異にまとまりがあるようだが、同一個体群内でも変異があるようであり、変異幅は明らかになっていない。九州阿蘇地方の端部(はたべ)地域で最初に気づかれ、地名にちなみハタバカンガレイと命名された。湧水地やその周辺に生え、分布が点在し、各地で相前後して気付かれたため地名や発見者に因んだ色々な和名がつけられている(ナスノカンガレイ: 栃木県那須地方、ハコネカンガレイ: 箱根仙石原、オトマスカンガレイ:

乙益正隆氏, キタワカカンガレイ: 宮崎県北川町). 正確な分布域は明らかでないが, 本州 (栃木県, 東京都, 神奈川県, 静岡県, 長野県, 富山県, 京都府, 三重県, 和歌山県, 山口県), 四国 (愛媛県), 九州 (福岡県, 熊本県, 宮崎県, 鹿児島県); 朝鮮半島の標本を確認している. 湧水地や湧水を起原とする水路などで多少とも流れがある場所に生える. 県内では箱根仙石原の湿原に自生し, 古くは 1925 年に採集された標本があり (堀内 2002 FK (52) 617), 今日では同湿原内の小さな流れの際で少し水に浸かって生えるが少ない (小崎 1992 FK (32): 348). 「神奈川 RDB」では絶滅危惧種とされた.

標本: Sengokubara 1925.8.28 B.Hayata TI; 箱根仙石原 1989.8.7 小崎・勝山・北川 KPM-NA1104772; 1990.9.1 勝山輝男 KPM-NA0118803; 1992.9.2 小崎昭則 KPM-NA1105273.

日本にはカンガレイ類が数種類認められている. 上記のハタバカンガレイの他, ツクシカンガレイやロッカクイ等, 近年になり認識された分類群がある. 形態的な違いの他, 生育環境や分布傾向も異なり, 互いに独立した分類群として扱うべきものである. 従来, 根茎, 葯の長さや形状, 柱頭の数に注目して区別されてきたが, 茎の質 (柔らかさや折れ曲がり方) も分類群により異なっており, 生育環境と対応関係があるように思われる. 中国や東南アジアでカンガレイ類に属する分類群が色々と記載されており, カンガレイ類はアジア地域で分化が進んでいる可能性がある. 日本の分類群も海外で記載されたものとの比較検討が必要である.」

7. イヌホタルイ×カンガレイの横浜市内の産地

区名の記載の無い下記の横浜市産の標本を新たに見出したが, 人文社 (1995) によれば, 横浜市には南区にのみ「永田北」, 「永田台」等の永田が付く大字名が複数認められるので, 採集地を南区として堀内 (2003b) で報告した.

証拠標本: 横浜市永田 1956.9.2 長谷川義人 YCMO22147.

8. 横須賀市産のイヌタイワンヤマイモドキの標本を確認する

イヌタイワンヤマイモドキはタイワンヤマイとイヌホタルイの推定自然雑種に対し命名・報告した

ものである (堀内, 2002). その際に引用した標本は横浜市戸塚区産のものであった. 今回以下の標本を確認したので報告しておく. 神奈川県植物誌 2001 の調査では片親であるタイワンヤマイの横須賀市産の標本は見いだされなかったが, 本標本が見出されたことで過去にタイワンヤマイが存在した可能性が高まった.

証拠標本: 横須賀市秋谷 1985.10.9 山内好孝 YCM005971.

謝辞

最後になりましたが, 筆者の誤りを御指摘頂いた岩村政浩氏及び小崎昭則氏, 標本を拝見させて頂いた京都大学総合博物館及び横須賀市自然・人文博物館の関係者の皆様に御礼申し上げます.

引用文献

- 堀内洋, 2002. 神奈川県植物誌 2001 カヤツリグサ科への補遺及び正誤. *Flora Kanagawa*, (52): 613-620.
- , 2003a. カヤツリグサ科ノート 7. すげの会会報, 10: 7-17.
- , 2003b. ホタルイ属. in 高橋秀男・勝山輝男・田中徳久 (監修), 横浜の植物, pp.406-417. 横浜植物会, 横浜.
- 北川淑子・堀内洋, 2001. カヤツリグサ属. in 神奈川県植物誌調査会 (編), 神奈川県植物誌 2001, pp.398-415. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 牧野富太郎, 1948. 牧野日本植物図鑑, 1070pp. 北隆館, 東京.
- 日本生態学会 (編), 村上興正・鷺谷いづみ (監修), 2000. 外来種ハンドブック, 390pp., 地人書館, 東京.
- 大井次三郎, 1982. カヤツリグサ科. in 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫 (編著), 日本の野生植物 草本 I 単子葉類, pp.145-184 + pl.126-168, 平凡社, 東京.
- Sato, T., T.Maeda & A.Uchino, 2004. A new species of *Schoenoplectus* sect. *Actaeogeton* (Cyperaceae). *J. Jpn. Bot.*, 79: 23-28.
- 人文社, 1995. 関東圏広域道路地図, 156pls. + 61pp., 東京.

オオチゴユリとエダウチチゴユリ

(木場英久)

分枝する比較的大きいチゴユリを寺井京子さんと菅澤桂子さんが採集され、県博にもって来られました。もしかして、これまで県内では記録のなかったオオチゴユリ *Disporum viridescens* (Mamim.) Nakai ではないかと思ひ、その可能性を検討しました。この植物は結局はチゴユリ *D. smilacinum* A.Gray の枝を打つ型でしたが、文献を調べたり東大総合研究博物館に行つて標本を観察して勉強したことを以下に紹介します。

オオチゴユリはチゴユリに似ていますが、全体に大型で、茎が枝分かれをするのが特徴です。チゴユリにも分枝するエダウチチゴユリ var. *ramosum* Nakai というがあるので、分枝の有無だけでオオチゴユリとチゴユリを識別できません。

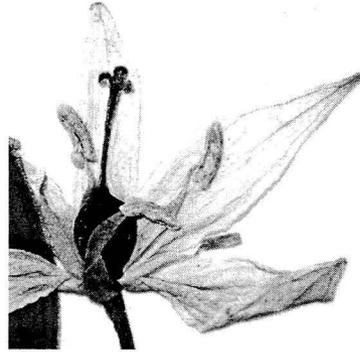
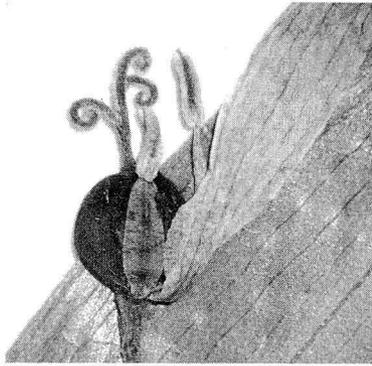
『日本の野生植物』の検索表によると、チゴユリでは花被片は白色、子房は倒卵形、花柱は子房の2倍の長さ、花糸は葯の2倍であるのに対して、オオチゴユリでは花被片は白色でやや緑色を帯び、子房は球形、花柱は子房と同長、花糸は葯と同長とあります。『日本植物誌』でも『原色日本植物図鑑』でもほぼ同じように書かれてい

ます。ところが標本になってしまうと花被片の色はほとんどわかりませんし、おしべの基部も花被片に隠れて見えないことがよくあります。また、チゴユリの子房も熟すと球形になってしまうので、子房の形が使えるのは若いうちだけです。残念なことに県博所蔵のオオチゴユリは、すべて果実が熟した状態のものばかりでした。

それで、東大でより若い状態の標本を見ることにしました。花被片が残っているくらいの若さで、めしべの見やすい標本は少ないのですが、探し出して比較すると、たしかに検索表のとおり、オオチゴユリでは若いうちから子房が球形でしたが、チゴユリではホソリしていました。子房や花糸は花被片に隠れていることが多いので、どの標本でも見られるというわけにはいきません。何か別の形質で見分けられないかと他の文献を探していると、Hara (1988) により区別点がかかれていました。オオチゴユリは分枝より下の葉が3~7個、柱頭は深く3裂し、チゴユリはより基部で分枝し、分枝の下の葉が1-2個で、柱頭は上部で裂けるのだそうです。これなら、花を分解しなくても観察できるので便利です。1点だけ、柱頭の裂け方や子房の形からエダウチチゴユリと思われる



左：オオチゴユリ（群馬県産）、右：エダウチチゴユリ（北海道産、東京で栽培）。東京大学総合研究博物館所蔵。



雌しべ。左:オオチゴユリ,右:エダウチチゴユリ。前ページの標本と同じ。

のに分枝以下に葉を3個つけている標本(箱根1957.5.20 西尾和子 KPM-NA000795)がありました。東大で見た多くの標本は、葉の枚数と柱頭や子房の形質とで矛盾なく分かれました。

今回の標本は、分枝の下に葉が2枚しかなく、柱頭も深くは裂けていません。菅澤さんによると落葉樹林の林床にチゴユリに混ざって生えている数個体が分枝していたのだそうなので、エダウチチゴユリだと考えた方がよさそうです。

チゴユリは南千島、北海道～九州、朝鮮半島と山東半島にかけて分布し、オオチゴユリは、朝鮮半島から吉林省と、本州中部以北と北海道の南側に離れて分布しています(Hara 1988)。栃木、群馬、埼玉、茨城など近県に分布があり、Hara (1988)には秩父武甲山(1962年採集)や新原町田(1929年採集)の標本が引用されています。これらのことから神奈川県内に自然分布があってもおかしくないと思われまので、今後、オオチゴユリが見つかるといういなあと思いました。

標本 津久井郡藤野町 2004.4.21 菅澤桂子・寺井京子 KPM-NA0124058.

参考文献

- 「群馬県植物誌改訂版」編集委員会編, 1987. 群馬県植物誌, (32)+604pp. 群馬県.
- 奥山春季, 1947. 植物採集覚書. 植物研究雑誌, 21: 65-67.
- 奥山春季, 1968. 新産地短報(10) ヤマトグサとオオチゴユリの新産地. 植物採集ニュース, (39): 30.
- Hara, H., 1988. A revision of the Asiatic species of the genus *Disporum* (Liliaceae) In H.Ohba & S.B.Mallads. *The Himalayan Plants*, 1: 163-210.
- 檜山庫三, 1957. ボタニカルノート(80): オオチゴユリの花. 野草, 23(219): 1.

伊藤洋編, 1998. 埼玉県植物誌, 833pp. 埼玉県教育委員会.

佐竹義輔, 1941. 日本植物時報(2). 植物研究雑誌, 17: 500-502.

栃木県植物同好会・栃木県植物目録改訂版調査作成委員会編, 2002. 栃木県高等植物目録改訂版, 340pp.

入生田からタキミシダを発見

(出川洋介)

2003年11月14日、小田原市入生田でタキミシダ(*Antrophyum obovatum*, シシラン科)を発見したので報告する。タキミシダは千葉県以西の暖帯から亜熱帯に分布し、全国的にも発生が僅少で各県のレッドリストでも掲載がみられるが、神奈川県レッドデータ生物調査でも、絶滅危惧種(En-D)とされている。神奈川県内では、古くから奥湯河原に分布することが知られていたが、1973年の記録(大谷1976)以後、確認されているものはない。また1988年に逗子市葉山町の森戸川で志澤光朗氏により発見された1個体も青木清勝氏により標本が確保されたのち、崖崩れにより生息地が失われたという(神奈川県レッドデータ生物調査報告書1995, 神植誌2001)。以後県内からの報告例はなかった。

今回の発生地は、箱根町の塔ノ峰を源流として早川に注ぐ吾性沢という溪流沿いである。この溪流は生命の星・地球博物館に近いことから、1998年にフロラ調査(高橋ほか1998)、植生調査(田中ほか1998)が実施され、その後も観察会などのフィールドとして頻りに調査がされており、筆者も、1999年4月以来、毎月、菌類相の継続調査を続けている。発生地は、沢の侵

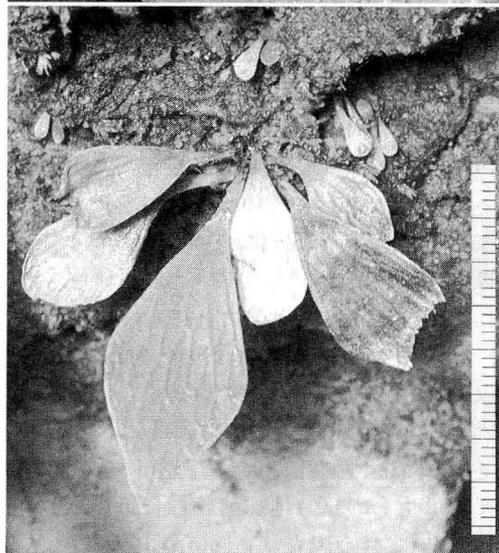
食により急傾斜をなす河岸の南向き斜面（標高約100m）で、斜面の上部は良好なスダジイ林となり、木漏れ日が差す程度の日かげとなっている。崖面の土壌や砂礫中には、大きな岩（亜角礫の巨礫）が含まれており、所々で崖の途中から水が滲み出して、ほぼ常時湿っている。付近には、イワガネソウ、コモチシダ、トウゲシバ、ヘラシダ、マメヅタなどのシダ類が多い。また、付近のアオキには、高湿度の沢沿いに多いアオキの星型スズ病（*Asterina aucubae*, 小房子囊菌：アオキの葉の表面や裏面に、黒色の菌糸コロニーを発達

させる）の着生が著しく、空中湿度も常時、高く保たれていると考えられる。

今回発見されたタキミシダは1株のみ、大小の巨礫（大きなもので直径約1m）が組み込まれた崖面のくぼみに生育しており、葉の形状、質感、葉脈が粗い網目をなすなどの特徴から本種と同一とされた。昨年11月の発見時、葉が5枚ついていたものが、本年9月現在で6枚となったが、最大で長さ4cm×幅1.6cmの小さなもので（この葉自体、11月から8月の間にほとんど変化していない）、現在までに裏面に孢子囊の形成は認められていない。昨年11月に、この株のすぐ右脇に、小さなへら型の葉が2枚生えていたが、9月には、成長してさじ型となり、枚数が増えるとともに、さらに付近にも同様なものが複数発生しはじめた。長さ1cm×幅5mm未満の非常に小さい葉だが、やや厚ぼったい質感があり、中肋がはっきりせず網目状の葉脈が認められ、タキミシダの幼体ではないかと推定される。これと同様の幼植物は、成体の周囲直径約1m以内に、計10株が確認されている（9月現在）。現在のところ成体での孢子囊群の形成は未確認であるものの、もしこれらがタキミシダの幼体であれば、同地では良好に増殖しているものと考えられる。この一帯には微小な前葉体も多数見られたが、本種のものかどうかは不明である。周辺の同様な環境下で他のタキミシダの個体を探したが、現在までに別の場所からは見つからない。なお、吾性沢周辺では本年7月21日午後15時、「突風」があり、一時間ほどの間に尾根筋付近の各所の崖が崩壊して巨樹が倒れ、径1cmを超す雹が強く降ったが、谷沿いにある今回の発生地については顕著な影響はなかったようである。今後、継続的に同地での発生状況を観察していきたい。

文献

- 大谷茂, 1976. 神奈川県羊歯植物(8). 横須賀市博物館研究報告, (22): 1-22.
- 神奈川県レッドデータ生物調査団編, 1995. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書. 257pp., 8pls. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 高橋秀男, 勝山輝男, 木場英久, 田中徳久, 1998. 小田原市入生田吾性沢地区の植物相 神奈川県自然誌資料. (19): 89-100.
- 田中徳久, 勝山輝男, 木場英久, 高橋秀男,



タキミシダ。上：2003年11月14日撮影。成体の右脇に小さな卵型の葉が二枚見られる。下：2004年9月4日撮影。スケールの目盛りは1mm。成体の葉が増え、幼体と思われるさじ型の葉も明らかに増えて成長している。

1998. 小田原市入生田吾性沢地区の森林群落. 神奈川自然誌資料 (19): 79-88.
横浜地方気象台, 2004. 平成 16 年 7 月 21 日に小田原市及び箱根町で発生した突風による風害. 17pp. 横浜地方気象台.

上瀬谷のキクバアリタソウ

(勝山輝男)

フロラカナガワ No.57 で松本雅人氏が上瀬谷の帰化植物について報告されているが, そのなかにキクバアリタソウがある. キクバアリタソウ *Chenopodium foetidum* Schrad. はユーラシア大陸に広く分布するアカザ科アカザ属の 1 年草で, 中国東北部のものに和名がつけられているが,



キクバアリタソウ.

上: 集散花序の一部, 下: 全体
(佐々木あや子画).

これまで日本への帰化の記録はなかった. 花序の形など植物体はハリセンボン *Ch. aristatum* L. によく似ているが, 花序の枝先が針にならず, 茎の上部や花序枝に柄の短い腺毛が密生すること, 花被片に腺毛と刺状毛があることが異なる. 上瀬谷で採集されたものは高さ 10cm 程度の小型の個体が多く, 葉は長い柄があり, 楕円形で長さ 1 ~ 2cm, 縁は羽状に中裂する.

標本: 横浜市瀬谷区上瀬谷 2003.5.5 松本雅人 KPM-NA0123411; 同 2003.5.8 KPM-NA0123412; 同 2003.5.26 KPM-NA0123413.

2004 年度総会報告

(事務局)

2004 年度の総会は 4 月 4 日 (日) に, 特別展「三浦半島の花と緑」を開催中の横須賀市自然・人文博物館で行われました. 2003 年度の事業報告, 決算報告, 各ブロックの活動報告がなされ, 2004 年度の事業計画, 予算が承認されました. その後, 例年行われる調査会会員によるミニレクチャーに替わって, 今回は東京都立大学牧野標本館の藤井紀行氏をお呼びして, DNA を用いたブナなどの系統地理学的研究について講演していただきました.

● 2003 年度 事業報告

● 2003 年度 決算報告・監査報告

● 2004 年度 運営体制

● 2004 年度 活動計画

● 2004 年度 予算